

# 東住吉 100 物語

寺社・史跡・伝承

## 20. 北田辺の大楠

所在：北田辺 6 丁目 2

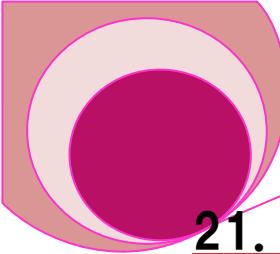
市道(昭和町一西脇町)が計画され、大阪市が移転(撤去)を決定した時に、道路用地内にあった樹齢 300 年、周囲:3.3m、高さ 16m の大木を保存する運動が地元民から起きました。

地元民の有志が「北田辺の大楠の保存を考える会」を発足し、6000 名の保存署名を集め、公聴会で 57% の保存要求決議を経て、存続が決まったものです。

現地では、4 車線の道路が楠の部分だけ、2m ほど内側に凹んで、敷設されています。

大木(特に楠)を切り倒すと、その人にたたりがあると恐れられた時代は過ぎたのかもしれません。





## 21. 行基の墓

所在：公園南矢田 3 丁目 14

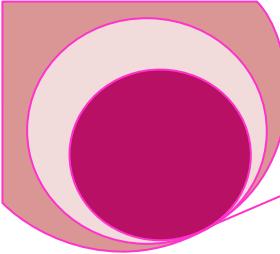
公園南矢田 3 の二ヶ所の共同墓地内に、それぞれ行基菩薩の墓があります。

立派な墓ですが、有名な生駒竹林寺墓所や往生院火葬場跡は歴史学的に確認できますので、この墓は単なる「供養墓」だと考えられています。

また、大和川に掛かっている、府道 26 号線の大橋の名前が行基橋となっていますが、この橋に行基が関わる筈がないので、この地域での行基伝承には疑問が残るもの、行基の師・道昭が活躍した証拠(舟戸録)が瓜破にあるので、行基もこの地域に関わっていたことは否定できません。

従って、「行基や道昭や、その弟子達の指導を受けて開発された土地柄である」と考えることもできます。





# 東住吉 100 物語

道路・街道・交通

## 22. 近畿日本鉄道南大阪線(元大阪鉄道株式会社:通称大鉄)今昔

所在：北田辺 4 丁目～矢田 2 丁目

近畿日本鉄道南大阪線は、現在の近鉄の路線の中で最古の歴史を持つ区間です。

明治 29 年（1896）に河陽鉄道として河内柏原・道明寺・古市間を開業、当時国鉄と同じ幅の狭軌の軌道で相互に貨物を輸送していました。当初は汽車が牽引していました。3年後その事業を引き継いだ河南鉄道が、さらに河内柏原から河内長野に延長、当時の高野鉄道（現在の南海高野線と連絡、明治 41 年（1908）には、ハンガリー製の蒸気動車（客車の一部に蒸気機関を設置）を投入、輸送効率の改善を図りました。

- 大正 8 年（1919 年）、社名を「大阪鉄道」に商号変更し、以後、「<sup>だいてつ</sup>大鉄」の愛称で呼ばれてきました。大鉄の鉄の字は「お金を失う」と書くと縁起が悪いと、金偏に <sup>かね</sup><sub>や</sub> <sup>だいてつ</sup>矢の大鉄と書いていました
- 大正 11 年（1922 年）、道明寺—<sup>ぬのせ</sup>布忍間が、大正 12 年（1923 年）4 月には布忍—大阪天王寺（現大阪阿部野橋）間が複線、1500V 直流電化で開通し、ついに念願の大都市大阪への進出を果たしました。同時に矢田・針中野駅が開業。同年 12 月には北田辺駅も開業しました。

針中野の駅名は、平安時代から続く鍼灸院の中野家が駅の設置に貢献されたので針中野と命名されたとの事です。

- 昭和 4 年（1929 年）に古市—橿原神宮間開通し、大阪電気軌道（大軌）と連結して、大阪阿部野橋—吉野間直通運転を開始しました。
- 今川駅は昭和 6 年（1931 年）に開業し、当初は「駒川」と称していましたが、昭和 8 年（1933 年）4 月に今川と改称されました。
- 昭和 18 年（1943 年）に関西急行と合併、昭和 19 年（1944 年）に戦時企業統合で近畿日本鉄道となりました。戦後企業統合が解かれた際、近畿日本鉄道に残り、南大阪線となりました。



昭和 47 年（1972 年）10 月の今川駅上り 1



昭和 47 年（1972 年）10 月の今川駅上り 2

以前は、今川駅から針中野駅の区間は土手で、南海平野線の上を立体交差していました。



令和4年（2022）8月 今川駅前（手前阿倍野橋側）



令和4年（2022）8月 針中野駅前（手前阿部野橋側）



- 現在は、阿部野橋駅から大和川まで高架になり、矢田・針中野は昭和51年(1976年)に、今川・北田辺は昭和62年(1987年)に開業しました。各駅前は商店街やスーパーがあり、特に針中野駅前は、戦後、大阪の3大商店街の一つにまで発展した、駒川商店街に隣接し、(なんでも揃う、安い、買やすい、などと)藤井寺・河内松原などからの遠来の客も多く、年中賑わっています。
- 大鉄電車の開通当初、大正時代は、住宅はちらほらで、見渡す限り、田畠だったので、「鍬やおけ」などの農機具を担いで乗車する人もみられました。
- 大鉄電車は、戦前は勿論、戦後も暫らくの間、扉は手動でしたので、車掌さんの労力は大変なものでした。電車が駅に停車すると、車掌はプラットホームに降り、電車の一番前辺りまで走り、乗客の乗降が完了したのを確かめて合図の笛を吹き、発車準備完了を運転手に連絡します。すると、電車は徐行し始めます。出入り口の扉は乗客が乗降時に閉めますが、全ての扉が閉まっているとは限りません。車掌は後方に小走りしながら、まだ客が閉めていない扉を順次閉め、最後部の車掌室の入り口が自分の前を通過するときにすばやく飛び乗っていました。ですから、時には最後部の扉が閉まっていた(停発車時の反動で閉まるときがある)為、車掌は電車に乗ることが出来なかったり、また飛び乗るタイミングがズレで駅の端の木製の柵などに片足が引っ掛けられて振り落とされたり等のハプニングで、電車は車掌を乗せないまま次の駅に行ってしまうこともありました。今なら、大変なニュースになったとおもいます。振り落とされてもあまり大きな怪我をしたということを聞かなかつたのは、その頃の車掌さんは皆、運動神経が良かったからでしょう。

### 23. 百済貨物ターミナル駅

所在：今林3丁目

天王寺駅・平野駅で行っていた貨物取り扱いを集約するために作られた貨物専用駅。

昭和38年（1963年）開業。

昭和39年（1964年）大阪市中央卸市場東部市場への貨物線として百済～東部市場内が開業。

その後、トラックによる運送手段が中心となったので、昭和59年（1984年）2月1日百済～東部市場間の貨物線が廃止されました。  
(円弧を描く道路はこの名残りです)



戦前からこの付近に百済駅（関西線）が置かれていましたが、現在の東部市場前駅に新設されたのは平成元年（1989年）11月11日です。

また、平成25年（2013年）3月、梅田貨物駅の機能が当駅と吹田貨物ターミナル駅に分散移転されることに伴い、改修事業が鉄道建設・運輸施設整備支援機構により進められ、新たに百済貨物ターミナル駅として生まれ変わりました。

百済貨物ターミナル駅 広域避難場所に指定されています

# 東住吉100物語

## 24. 百済の地名

### 寺社・史跡・伝承

区内での百済の地名は、明治22年(1889年)に鷹合、砂子、湯谷島、中野の4ヶ村が合併して、南百済村とされたことに因ります。現在は南百済小学校や百済公園に百済大橋などに、その地名が残るのみで、行政上での地名はなくなっています。

日本書紀（続）から、東住吉の百済との関係を探すと、

#### (1) 持統天皇7年(693年)紀1月条

第31代百済王・義慈王は唐や新羅に攻められて、大和王朝に救援を依頼し、2人の皇子(豊璋と善光)を派遣した。

#### (2) 齐明天皇6年(660年)紀7月条、天智天皇2年(663年)紀8月条

百済(豊璋)に援軍を付け、百済遺臣・佐平鬼室福信に迎えられて遠征した(齐明6年紀)が、白村江で惨敗し、百済は滅亡し、豊璋は行方不明(天智2年紀)となる。

#### (3) 天智天皇3年(664年)紀3月条

残された善光に難波(天王寺区堂ヶ芝・百済寺跡と細工谷・百済尼寺跡)に住まわせる。

以後、天武天皇、持統天皇の時期には百済王として、優遇されており、百済人が善光を頼って続々と亡命してきたので、この一帯を百済と呼ばれるに至った。

#### (4) 聖武天皇(続)天平21年(749年)紀4月22日条

善光の曾孫・<sup>きょうふく</sup>敬福は、大仏建立のために黄金900両を献上し、従5位陸奥守から従3位河内守に4階級も特進したが、一族の住む場所が次第に物流や交通の要所となるに及んで、天皇は敬福一族を枚方の地に移住を命じ、難波の百済は消滅する。

#### (5) 現在の百済王の末裔

百済王家は平安末期に三松と改姓している(枚方市史、史上の人物、433頁)が、平安期に三松性が現れていないので、この説は歴史学的には認められていない。しかし、枚方市禁野1丁目に立派な三松家の墓地があり、百済王族末裔の墓であるとされている。また、明治初期における砲術家や神官となった三松家の4人の経歴を枚方氏史は百済王族の子孫と伝えている。枚方市の百済寺跡は廃墟となっているが、国指定の史跡である。

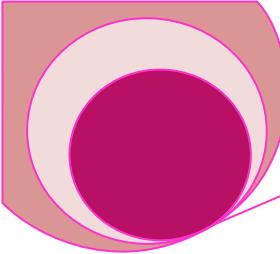
ちな  
東住吉区に残る百済地名



上・百済大橋

下・南百済小学校





# 東住吉 100 物語

道路・街道・交通

## 25. 杭全交差点

所在：杭全3丁目、6丁目

国道 25 号(奈良街道)、森小路大和川線(今里筋)、美章園街道という幹線道路が交差し、大阪市内でも有数規模の 5 差路交差点です。この交差点は昭和 35 年(1960 年)まではロータリーでしたが、昭和 35 年(1960 年)7 月に交差点内に信号機が設置されロータリーがなくなりました。

杭全交差点には横断歩道がなく、昭和 43 年(1968 年)に設置された歩道橋が交差点に進入する 5 方向からのそれぞれの歩道をつないでいます。

森小路大和川線は戦前から工事を始められていきましたが、戦争期の中断をはさんで全線が開通したのは昭和 47 年(1972 年)でした。

歩道橋が設置された当初は、歩道橋には自転車及び車椅子等のスロープが設置されておらず、自転車が認められた歩道を走行した場合、交差点で行止まり状態になっていました。様々な問題を解決すると共に老朽化した歩道橋の取替について、平成 18 年(2006 年)より国と地元で協議され、平成 25 年(2013 年)5 月より架替工事が開始され、平成 26 年(2014 年)10 月にエレベーターがついた陸橋として利用が開始されました。(歩道部分は平成 26 年(2014 年)6 月利用開始)

昭和 38 年(1963 年)の杭全交差点



交通関係では

① トロリーバス

杭全～守口間を昭和 37 年(1962 年)～昭和 45 年(1970 年)迄運行していました。

② 関西線 (JR 大和路線)

湊町～柏原間明治 22 年(1889 年)開通。湊町～奈良間明治 23 年(1890 年)開通。

天王寺～平野間高架工事昭和 43 年(1968 年)完成。

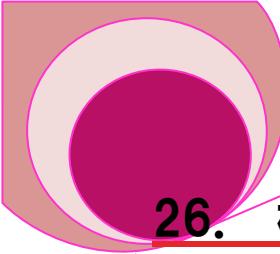
高架になるまでは「杭全開かずの踏切」といわれていました。

蒸気機関車・ディーゼル車から電化になったのは昭和 48 年(1973 年)です。

東部市場前駅は平成元年(1989 年)11 月 11 日開設しました。



杭全交差点平成 15 年(2003 年)



26.

## くまたほうかいじぞう 杭全法界地蔵

所在地：杭全7丁目6-26

# 東住吉100物語

寺社・史跡・伝承

杭全には古くから（寛政4年（1792年）建立）、大きくて（お頭だけで37cm）立派なお地蔵さんがあります。

珍しいことに肝心のご本尊は雨ざらし、拝む所は屋根付です。

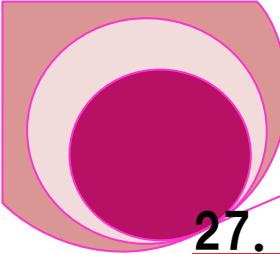
お堂も無かった昔は、雨のとき、暑さ寒さのとき、見かねて笠や頭巾をかけていました。しかしすぐ風で吹きとばされてしまうので、「地蔵さんは覆いが謙いだ」と解されたいわれがあります。

建立時の祭具には「新在家前地蔵」と刻まれていますが、今は「杭全法界地蔵尊」とよばれています。

新在家は杭全の旧地名で、法界とは大宇宙を含むあまねくという広い範囲で、一切の願いごとを叶えてくれる格の高い地蔵さんであることを表しています。

大型であり、しかも半跏座（片足が垂下）の地蔵菩薩は珍しく、老若・遠近に拘わらず年中参詣者が絶えません。





## 27. 桑津天神社

所在：桑津3丁目4-17

「日本書記」によると応神天皇(4世紀)の頃、日向の国から美女の 誉高い、髪長媛※を召され桑津の地に住まわせたと記されています。ひめはのちに仁徳天皇のひめとなられました。

髪長媛は桑津天神社に奉祀される以前は、明治6年(1872年)廃寺となった金蓮寺が髪長媛の宮跡であった関係で、境内の八幡宮に奉祀されています。

また桑津天神社には少彦名命も祀られていますが、これは髪長媛の病気祈願のため医薬の祖神である少彦名命が祀られたとの伝えによっています。

### ※髪長媛

髪長媛は、現在の宮崎県都城市早水町の早水神社の早水池のほとりに生まれたという伝説があります。早水神社の祭神は応神天皇・牛諸井・髪長媛の三柱です。

髪長媛と仁徳天皇との間に、大草香皇子と幡梭皇女が生まれました。

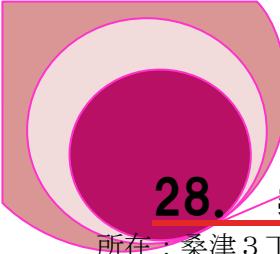
「日本書紀」によると、大草香皇子は妹の幡梭皇女と結婚する大泊瀬皇子(後の雄略天皇)に美麗な「押木玉縄」を献上したと記されています。

しかし、大草香皇子は根使主のざん言により安康天皇に刺殺され、髪長媛と娘の幡梭皇女の最後は不明となっています。

髪長媛の名前は桑津天神社におまつりしているだけではなく、同じ名前でいろいろな地方にも見られます。

伝説的色彩がきわめて強く、古代では「髪」は人名ではなく一般に若い女性をさし、機織りの名手で黒髪長く背丈以上もあったのでこう呼ばれたともいわれています





## 28. 桑津だんじり

所在：桑津3丁目4-17

# 東住吉100物語

寺社・史跡・伝承

桑津のだんじりの起源は、文政年間（1818年～1831年）で、保存会も同時期に結成され、現在「桑津天神社地車保存会」として継承されています。

毎年、7月16日・17日のお祭りには、町のあちこちの角でハッピ姿の子ども達がたっています。だんじりが通ると綱引きの中に加わります。

昔は電灯がないため提灯には灯明油が使われていたそうです。電灯が使われたのは大正2年（1913年）ごろで、今ではだんじりにバッテリーが積まれています。

桑津だんじりのまわる地域は19町会あり、だんじり曳行えいこうは大変です。

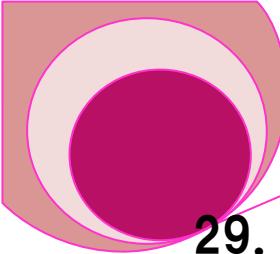
しかし、地元の長老、青年団とも、貴重な町の文化財である「だんじり」と「だんじり囃子はやし」を大切にし、さらに盛んにしていく考えています。



地元の桑津小学校では、だんじりの「写生会」を行ったり、「地域学習」や「体験学習」として地車保存会の人たちから桑津だんじり囃子の手ほどきをうけたりしています。



「桑津天神社地車の由緒」の碑



## 29. 桑津遺跡

所在：桑津5丁目13-13

桑津小学校正門脇には、「桑津遺跡」の石碑があります。平成4年（1992年）3月、大阪市顕彰史跡として建立されたものです。

桑津遺跡は東住吉区桑津・駒川・西今川・北田辺一帯に所在する縄文時代前期から中世にいたる複合遺跡で、立地するのは、上町台地東斜面の標高3~6mのところです。遺跡の発見は昭和4年（1929年）、工事現場から土器や石器が出たことが発端で、発掘調査がはじまりました。

昭和12年（1937年）・昭和58年（1983年）・平成になってからの工事でも、桑津小学校校庭、東住吉中学校校庭、旧国鉄官舎跡その他いろいろなものが出土しました。

また平成3年（1991年）、廃井戸の底からわが国最古の「呪符木簡」<sup>じゆふもっかん</sup>が発見され、大きなニュースになりました。

### ・縄文時代以前

旧石器時代から縄文時代への過渡期に出現する有舌尖頭<sup>ゆうぜつせんとう</sup>が、東住吉中学校校内調査から出土しました。また、縄文時代前期頃の石鏃<sup>せきそく</sup>が桑津4丁目で出土しています。

このことから、桑津遺跡に人が住み始めたのは約1万年以前にさかのぼると考えられています。

### ・弥生時代

弥生時代の遺構は、桑津3丁目から5丁目にかけての広範囲で検出されています。

居住にかかる柱穴・土壙<sup>どこう</sup>・溝・井戸や、埋葬にかかる方形周溝墓<sup>ほうけいしゅうこうぼ</sup>など、居住地と墓地というムラのようすがわかります。

出土道具には農具（石包丁）、工具（蛤刃石斧<sup>はまぐりばせきふ</sup>・抉入片刃石斧<sup>えぐりいりかたはせきふ</sup>）、漁具（蛸壺・石錘）、武器および狩猟具（石鏃・石槍）、（紡錘車）などがあります。

### ・古墳時代

5世紀後半の須恵器<sup>すえき</sup>・土師器<sup>はじき</sup>が広範囲で出土しています。

### ・飛鳥時代以降

奈良時代後期の大規模な堀立柱建物が、桑津4丁目から検出しました。

平安時代以降から中世にかけては、綠釉陶器<sup>りょくゆうとうき</sup>や輸入陶磁器の出土遺物から、居住地となっていたことが推測されます。

桑津遺跡に関しては、宝暦12年（1762年）の桑津村の地籍図に「大塚」、「赤塚」、「罐子塚」など古墳らしき字名がみえます。

「大塚」については近年の町名変更前まで美章園近くが大塚町と呼ばれており、古墳があったことを今に伝える町名のひとつであったといえます。



（桑津小学校前、桑津遺跡の碑）

# 東住吉100物語

## 30. 桑津環濠集落 かんごう

所在：桑津3丁目

中世の<sup>せっかせん</sup>摂河泉一帯には、堺、平野をはじめとして、多くの環濠集落が成立していました。

環濠集落建設の目的は一般的に、(1) 軍事的警察的自衛 (2) 保水灌漑 <sup>かんがい</sup> (3) 洪水対策 の三つであるといわれています。

桑津の場合、(1) の軍事的警察的自衛手段として四周を<sup>すいごう</sup>水濠に囲まれ、竹藪で一部囲まれていました（古老の話）。外周の濠の東南部に2カ所、金蓮寺東側に2カ所、それぞれ少しづつ離れて濠が広くなって池となっていました。

外部に通じる道路としては北に2カ所、南に1カ所、西に1カ所の計4カ所だけで、現在でもその地名として桑津北口・桑津南口などが残っています。

これら入口には木戸が設けられ、夜間は閉ざされていました。

慶応4年（1868年）の鳥羽伏見の戦いの頃、落武者が夜にやってきて、「おたのみ申す おたのみ申す」と木戸を叩いて救いを求めたが、村人は後難を恐れ灯を消して木戸を開けることは無かったそうです。集落内の道路は、北口より南口へ見通しの出来ない程度の、ゆるいカーブのある直線道路が一本あるだけで、他は複雑な屈曲をみせています。

南北に通じる道路として、もう一本京善寺東側道路がありますが、最短で30メートル先がみえない屈曲、見通しの出来ない四辻が2カ所、三辻が2カ所あり、その他の道には袋小路、クランク形やL字形の曲りなど、初めて来た者には分かりにくくなっています。

軍事的自衛手段としてもう一つ、環濠の南側に突出部があります。南口からの侵入者に対して横矢をかける目的でつくられたと思われます。

(2) の保水灌漑として集落内の排水溝と考えられる箇所として、西側の南北に通じる道路は現在も低くなっています。南北からの水が合流し東に流れ、一旦池に入ってから環濠に入り込んでいたようです。

(3) の洪水対策としては環濠集落東側に駒川・今川が流れ北上して平野川に入っていますが、桑津環濠集落は上町台地の東縁の<sup>かんけいしやち</sup>緩傾斜地で外側とはっきりした段差が認められており、集落東側の川が氾濫しても集落内が浸水しにくくなっていました。

桑津環濠集落は昭和はじめ頃まで、およそ400年間続いていました。

今では、濠はうめられて道路に変わりましたが、細くて曲がりくねった道や、木戸口にまつられた地蔵尊は今も残され、往時を<sup>しの</sup>偲ばせています

川・堀（環濠）・橋

